OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	冷泉為恭筆「年中行事図」について
Author(s)	宇野, 千代子
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 2002, 36, p. 27-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48180
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

冷泉為恭筆「年中行事図」について

宇野千代子

はじめに

冷泉為恭（一八二三～六四）は、江戸時代後期の復古大和絵派の絵師として知られる。有職故実に造詣が深く、公家の様々な年中行事を題材とした作品を数多く遺している。

本稿で取り上げる作品も公家の年中行事を画題としており、各月一つの行事を選び、十二面の絹本色紙に着色で描いている。その繊細な筆致は誠に美しく、為恭の小画面における巧みな表現を堪能できる優品である。

十二面の色紙は折帖に仕立てられ、片方の面に台紙一枚おきに貼られている。そして折帖のもう片方の面には、和歌を一首ずつ墨書した十二面の色紙がやはり台紙一枚おきに貼られている。十二首の和歌は、為恭と同じ頃に活躍した十二人の歌人・国学者によって書されたものである。本作品は、制作に関わった人物たちの関係について考えをめぐらすことが出来る点でも興味深い。

本作品は現在、サンリツ服部美術館の所蔵になる。出版物への掲載は初めてであり、ここで詳しく紹介し、その

内容と為恭の表現手法とについて考察してみたい。

作品の概要

各色紙の大きさは、一～二ミリの長短はあるがほぼ同寸であり、縦二一・四センチ、横一八・八センチが基準値である。二十四面ともに同じ絹を使用しているように見える。しかし、絵の十二面と和歌の十二面とでは装幀の仕方が少し異なる。絵の色紙も和歌の色紙も周りを幅一・五ミリ程度の金の枠で飾るが、絵の色紙十二面では金箔を散らした細い紙を絵絹の周囲に貼るのに対し、和歌の色紙十二面では絵絹の上に金箔を直接押している。

箱書は、蓋表に「公事十二ヶ月節會　菅原為恭筆」、蓋裏に「華郷記　『華郷』（朱文方印）」とあり、日本画家の岡田華郷（一八九三～一九八一）による。本作品の画題となっているのは朝廷を中心とする各月の年中行事であるが、公事や節会に限られているわけではないと思われるので、[1] 本稿では本作品を「年中行事図」と仮に呼んだ。

絵の十二面はすべてに為恭の落款があるが、署名の形式が各図において異なる。短いものから、「為恭」「大夫丞為恭」「式部大夫為恭」「式部大夫丞為恭」「蔵人所衆式部大夫為恭図」「従五位下式部少丞菅原為恭」「蔵人所衆従五位下式部少丞菅原朝臣為恭」「蔵人所衆従五位下行式部少丞菅原朝臣為恭謹図」「蔵人所衆関白直盧預従五位下行式部少丞菅原朝臣為恭図」と、九種類が数えられる。印章は、二種類の朱文方印「菅」を捺す。一つは「呂」が「㠯」となっているもの（縦十二・五ミリ、横十四ミリ）で十二図中七図に捺され、もう一つは丸みのある字体のもの（縦十一ミリ、横十一ミリ）で、「為恭」「大夫丞為恭」「式部大夫為恭」の三種の短い署名とともに五図に捺されている。署名に記された官位によって、為恭がこの色紙を描いたのは、従五位下となった安政五年（一八五

八）一月から、近江守となる文久二年（一八六二）一月までの間と考えられる。(2)

和歌の色紙には、装飾として金の砂子が上下二筋に撒かれる。為恭が描いたのと同じ行事を題材とする和歌が、十二種の異なる筆跡により墨書され、十二人の人物の名前が署名されている。各人が自詠の和歌を自らの手で書したものであろう。

本作品には、「公事十二ヶ月節會」と墨書された題簽一枚と、和歌の筆者十二人のうち十一人について短い注釈を記した罫紙一枚が付属する。注釈からは、和歌の筆者がいずれも幕末・明治の頃に京都で名の知られた歌人・国学者であることが分かる。(3)

各月の画題と和歌

まず、各図がどのような行事を画題とするかを見、各図に対応する和歌の釈文と筆者について記しておきたい。

①正月（図1・2）

かにもりの　けさしくみつの　みましこそ　よものはるめく　はしめなりけれ　種松

正月の図に描かれた行事は、四方拝と考えられる。四方拝は、元旦早朝に天皇が属星・天地四方・山陵を拝して、年災消滅・五穀豊穣・宝祚長久を祈る儀式である。和歌は、掃部寮が儀式に先立って清涼殿の東庭に屏風を立てめぐらし、その内に御座を三つ設けることを詠んだものであろう。為恭の図の、画面上方に描かれているのは、四方拝の場として設置された屏風と筵道であると判断できる。和歌に「種松」と署名した人物は谷森種松という、諸陵

寮の助を務めた国学者と考えられる。

ところで、為恭は公家の十二ヶ月の行事を画題とした作品を、本作品の他にもいくつか遺している。本作品（本稿では以下サンリツ本と呼ぶ）と同様に各月の行事を十二枚の色紙に描いたものには、「公事十二ヶ月画帖」（田中親美編『為恭画集』上に掲載[4]。以下A本と呼ぶ）や、「年中行事図」（『国華』第七五七号に楢崎宗重氏が紹介[5]。以下B本と呼ぶ）がある。また、十二枚の短冊に各月の行事を描いた作品として「公事十二ヶ月図」（『国華』第一〇二九号に水尾比呂志氏が紹介[6]。以下C本と呼ぶ）が挙げられる。これら三つの作品については実見の機会が得られなかったが、印刷物から確認できる範囲内でも、サンリツ本各図の主題や図様を考察するのに有効な手段となり得る。ちなみに、正月の行事としてA・B・C本が描いているのは、A本は御杖の行事、B・C本は小朝拝であり、四方拝を描くのはサンリツ本だけである。

②二月（図3・4）

もゝしきの　おほみや人も　ねかふこと　ありてやみつの　峯はこゆらむ　景恒

二月の図には、京都伏見の稲荷神社への初午詣の様子が描かれる。朱の鳥居をくぐって山道を降りる壷装束の女性は左手に緑鮮やかな小枝を持っているが、御神木の「しるしの杉」であろう。丘陵は太い墨線によってなだらかに描かれ、緑青と群青による彩色はやまと絵風である。

和歌は、稲荷山の三ヶ峰を詠み込み、為恭の図に合った内容となっている。二月の行事は、サンリツ本とB本に

は初午詣、A・C本には勅祭である春日祭が選ばれている。初午詣は朝廷の公式行事とはいえないが、和歌は「おほみや人」を主人公としており、宮中に仕える人の私的な年中行事として選ばれたのかもしれない。

筆跡は、香川景恒（一八二三～一八六五）のものである。景恒は、江戸後期を代表する歌人・香川景樹（一七六八～一八四三）の子である。景樹は多くの門人をかかえ、桂園派とよばれる一派を形成したが、景恒が二十一歳の時に没した。景恒は、サンリツ本の十二月の和歌の筆者・渡忠秋ら、景樹の高弟の援助を受けて桂園派を維持したといわれる。(7)

③三月（図5・6）

岩清水　上代のはるも　うつしみる　かさしのさくら　小忌の衣手　友干

三月の図には、石清水臨時祭の舞人と舞人乗用の移鞍を付けた飾馬が描かれる。毎年三月午の日のこの祭では、清涼殿で天皇が舞を御覧になった後、勅使は藤、舞人は桜の挿頭花を各々冠に付けた華やかな行列を組んで石清水八幡宮に向かい社頭に舞を奉納した。和歌に詠まれた小忌衣は、舞人が身につける青摺の袍を指す。為恭は背景には何も描かず、舞人や飾馬の美しい装いを丹念に描写している。舞人の顔は引目鉤鼻の手法で丁寧に描かれる。眉間、目と目の間が広く、おっとりとした表情に見え、下ぶくれの頬には淡く赤が差されて若々しい印象を与える。

和歌の筆跡は倉谷友干（～一八六三）のものである。友干は医を業とした京都の人で、歌を加茂季鷹に学んだ。和歌の筆者のうち没年が分かるのは十人であるが、そのうち友干の没年が一番早い。十二首の和歌の揮毫がほぼ同

時期になされたと考えると、その下限は友干の没した一八六三年三月十二日に設定できる。

④四月（図7・8）

忍ひねは　ゆかしきものも　神水ふる　水月のそらの　山ほとゝぎす　春臣

四月の図には、賀茂祭において勅使が宣命を読む姿が描かれる。人物の姿のみが描かれるが、賀茂神社に奉る宣命には赤い紙を使用することが定められているので、賀茂祭の勅使であることが分かる。冠に施された緑は、挿頭の葵の葉を表しているのだろう。

筆跡は、能勢春臣という京都の歌人のものである。春臣は和歌と古筆の鑑定とをもって知られ、『平安人物志』嘉永五年（一八五二）版にその名が記載されている。

⑤五月（図9・10）

しつ草の　末葉までこそ　うるほはめ　雲井の雨の　処わかねば　蓮因

五月の図には賑給が描かれる。賑給は高年・窮民に米塩を給する古代律令制における制度であるが、平安時代には儀式化し、毎年五月吉日に京中の窮民に対して行われるようになった。説話絵巻の古典における庶民の描写を思わせる本図には、為恭の人物表現の豊かさを見ることができる。窮民の列の先頭の、口と両手で袋を開けている人

物の剽軽な顔つき、その後ろで肩を寄せ合う老夫婦の素朴な表情、俵を勢いよく空けるのと同時に眼も口も開けている役人、弓矢を持つ警備の役人の冷静な目つきなど、それぞれの立場を明快に示す表現となっている。

筆跡は、京都の高樹院の僧・蓮因（一八〇八～一八九二）のものである。蓮因は俗性を拝郷氏といい、歌の道においても知られた人物である。

⑥六月（図11・12）

こひせしの　それにはあらて　すゝしきは　かみのうけひく　かものかは風　蓮月

六月は邪気祓の神道行事である大祓を描く。六月晦日の大祓は「水無月祓」「夏越祓」とも呼ばれ、宮中や貴顕の邸、各地の神社で行われた。本図では、髪、髭ともに白い老齢の人物が黒の束帯に威儀を正し、水辺で祓を行う様子が描かれる。

筆跡は大田垣蓮月（一七九一～一八七五）のものである。二十九歳の時に夫と死別し、仏門に入って法名を蓮月と号した。自詠の和歌を短冊などに記したり、手捏ねの陶器に刻んだり、数多くの筆跡を今に遺しているが、その書は丸みを強調した優美なものであり、「こひせしの」の歌の筆跡にもその特徴がよく表れている。

この歌は蓮月の自詠として、その家集『海人の刈藻』（明治四年［一八七一］序）に所載されている。『海人の刈藻』は、蓮月は自ら家集を編もうとしなかったため、その詠の散逸を惜しんだ周辺の人々が、蓮月の許しを得て、諸所に散在する詠を集成したものである。[8] 序文の筆者二人のうち一人が「ただ秋」、跋文の筆者二人のうち一人が

「ちか女」であるが、(9)「ただ秋」はサンリツ本の十二月の和歌の筆者である渡忠秋、「ちか女」は七月の和歌の筆者である上田重女であろうか。この二人が編纂に関わっていたとすれば、『海人の刈藻』にはこの歌も当然収録されるだろう。

⑦七月（図13・14）

ともし火の　なひくをみれは　あまのかは　つまむかへふね　連ねふくらし　ちう

七月の図には七日の乞巧奠が描かれる。平安期の宮中では清涼殿東庭に季節の果物を供え、裁縫の上達をはじめ手芸一般の巧みになることを牽牛・織女の二星に祈ったが、南北朝期には梶の葉に歌を書いて二星を祭るように変わったそうである。本図では、梶の葉と香炉のみの簡素な供物を前に、半月を仰いで合掌する女性が描かれる。

和歌に「ちう」と署名した人物は、付属する罫紙には記載がないが、蓮月と親交のあった上田重女（一八一八～一八九四年）と思われる。上田重女は名を「ちか」といい、「ちう」とも署名した。重女は、紀州の国学者・長沢伴雄の妻となったが、数年で死別。幼時より和歌を好み、近藤芳樹の門に学び、筆跡もよくしたという。

⑧八月（図15・16）

放生會　あめのした　何かはもれむ　いはしみつ　いけるををしむ　深きちかひに　享寿

八月の図には、石清水八幡宮で毎年八月十五日に行われる勅祭、石清水放生会が描かれる。石清水放生会は習合の法会で、神前に諸鳥が放たれ、川に諸魚が放流された。本図には、太鼓橋の下を流れる川に、白い水干姿の男性が魚を放つ様子が描かれる。

和歌に「享寿」と署名した人物について、付属の罫紙には「(竹内氏) 東寺ノ公人景樹門ノ高足ナリ景樹ノ歿後ソノ門人多ク享寿ノ門ニ集レリ慶應元年三月廿八日歿ス年五十四」と記される。慶応に改元されるのは四月七日なので、没年は正確には元治二年と記されるべきであろう。『和歌大辞典』(昭和六十一年　明治書院) は、東寺の公人であった竹内享寿について、没年を元治二年三月三十日、享年を六十六歳と記している。

⑨九月 (図17・18)

あひにあひて　かをるもたのし　さかつきに　御代なか月の　菊のした露　直躬

九月の図には、九日の重陽の節句に菊酒を飲む様子が描かれる。狩衣姿の男性は杯を持ち、袿姿の女性は菊の花枝を載せた長柄銚子を手にしている。

和歌に「直躬」と署名した人物について、付属の罫紙には「(水野氏) 大平ノ門人ナリ」と記される。「大平」とは、江戸後期の国学者・本居大平 (一七五六～一八三三) のことと思われ、水野直躬も国学を学んだ人物であったと推測できる。

⑩十月（図19・20）

雲のうへに　ふたゝひ色を　かへしけり　大宮人の　そてのしらゆき　延之

十月の図には、初雪見参が描かれる。初雪見参は、中古、初雪の降った日に宮中へ群臣が参内したこと、また、その儀式のことをいう。本図には、しゃがんで雪を固めるような仕草をする白い狩衣姿の二人と、その様子を眺める濃紺の袍の人物が描かれる。B本の十月の図にも本図と同じような行動をとる人物が描かれるが、楢崎氏の解説によると色紙裏面には「初雪の見参とて御前の壷に蔵人所衆の上臈滝口のともからをして雪山つくらしむるところ」と記されているということである。本図も、蔵人所の上臈が滝口の武士に雪山を作らせているところを表しているのだろう。

和歌の筆跡は、河本延之（一八一三～一八六五）のものである。延之は、国学者・河本公輔の息子であり、京都に住み、和歌をよくした。

⑪十一月（図21・22）

天地の　かみ代のひとも　おもふこそ　新なめまつり　こよひなるらめ　景嗣

十一月は新嘗祭を描く。新嘗祭は、天皇が新穀を神に供えて豊穣に感謝し、共にこれを食するという祭儀。祭の当日戌の刻（午後八時頃）、天皇は御輿に乗って内裏の西隣にある祭場、中和院の正殿である神嘉殿に行幸した。

本図には、黒・橙・黄・白の斑幔が描かれ、その向こうに葱花輦の御輿の屋蓋が覗く。潔斎をした参列者は青摺の小忌衣を着することになっているが、幔幕の前には小忌衣を着した人物が二人ひざまずいている。

筆跡は香川景嗣（一七九二～一八六五）のものである。景嗣は、通称を木工又は清三郎といい、香川黄中（一七四五～一八二一）の門に入って歌を学び、後その養子となった。

⑫十二月（図23・24）

ちはやふる　かみのみまへに　あそふとも　をさ〳〵しくも　みゆるなるかな　忠秋

十二月の図には内侍所臨時御神楽が描かれる。毎年十二月吉日、三種の神器の一つである神鏡を祭る内侍所に御神楽が奉納される。天皇は内侍所の中の御拝座で叡覧し、御神楽は前庭で人長の指揮のもとに行われる。本図に描かれるのは、前庭に焚かれた庭燎の前で、輪榊を手にして舞う人長の姿である。

筆跡は渡忠秋（一八一一～一八八一）のものである。忠秋は近江国の人。京都に出て、香川景樹について歌学を学んだ。明治七年（一八七四）に宮中の御歌所に出仕して歌道御用掛を勤めた。(10)

以上、各図が画題とする行事、各和歌の釈文と筆者について述べた。十二首の和歌には、為恭の絵の内容をそのまま詠んだような趣があり、先に出来上がっていた為恭の絵を見て詠まれたものと思われる。

ところで、為恭は三条実万（一八〇二～一八五九）・実美（一八三七～一八九一）父子の知遇を受けたことが知

られているが、一月の和歌を詠んだ谷森種松、十二月の渡忠秋は三条家に仕えた人物である。実美が少年時代に教えを受けた人物の中に、国学の師として谷森種松、歌道の師として渡忠秋の名がある。[11] 谷森種松は実万の家臣で、文久二年（一八六二）、実万の遺志を継いで、実美が荒れた累代の山稜の修復を行った時、その任に当たっている。[12] サンリツ本の正月の行事として、山陵が属星・天地四方とともに拝される四方拝が選ばれたのは、正月の和歌をこの種松が詠んでいることと関係しているのではないだろうか。

三条実万も香川景樹の門であったというが、[13] 渡忠秋は景樹の子である景恒を支えて桂園派を維持したという景樹門の実力派である。八月の竹内享寿も景樹の門人であり、また、大田垣蓮月の家集『海人の刈藻』からは忠秋が蓮月や上田重女とも交流のあったことが推測される。サンリツ本の制作においては、三条家を介して為恭、種松、忠秋が、さらに忠秋を中心に歌人たちがつながりを持っていたように思われる。

表現手法

次に、サンリツ本における為恭の表現手法について考察してみたい。特に注目したいのは、小画面の内に三次元の空間がしっかりと構成されているという点である。

まず構図であるが、サンリツ本の構図には特徴があり、十二図すべてが右上から左下への対角線を意識したものとなっている。ただし、十二月は最後の図であるせいか、右方への平行線も意識した落ち着いた構図となっている。例えば四月の図を見てみたい。人物の座像のみを背景を捨象して描く本図は歌仙絵を思わせる。しかし、像は画面中央ではなく、右上から左下への対角線の上方に寄せて描かれ、下方は余白としている。高く掲げられた赤紙と

それを持つ腕、少し仰向きの視線、裾、印章が対角線に添う。

ちなみに、A本の四月の図にも、宣命を読む賀茂祭の勅使の、斜め後ろから見た姿が描かれる。そのポーズはサンリツ本とほぼ同じであるが、像の位置は画面中央、落款の位置は右下であるため、サンリツ本のように対角線の左上に収まるような構図とはなっていない。A本とサンリツ本の制作時期には少なくとも三年の時間差があると考えられるが、数年の時を経て同じ画題を描く際、意図的に画面の整理を行ったとも考えられる。

ところで、サンリツ本の勅使の長い裾は、右上から左下への対角線とは逆に「く」の字型に途中で曲がり、複雑な襞を形作っている。これは、勅使が座っている平面を感じさせるとともに、画面の左下が鑑賞者側に近づき、右上が遠ざかるように見せる効果を生んでいる。本図の他にも、画面右上を遠方とし、左下を手前とするという方法は、一月、二月、五月、六月、八月、九月、十一月の図にも用いられている。為恭はサンリツ本において、遠近の表現を主に右上から左下への対角線を利用して行っているといえる。

画面を三次元に見せる方法としてもう一つ気が付くのは、事物の濃淡の表現である。例えば五月の図の、後ろ向きの役人の着衣に施された白は、腰・尻・両袖の先・両脚の背面がひときわ濃くなっている。これに対して窮民たちの着物の白はごく薄いものである。そのため、役人のかがめた腰が鑑賞者側に近く見え、窮民の列は遠ざかっていくように見える。

また、ぼかすという方法も、画面内に自然な空間を演出するのに効果的に用いられている。一月の図では、屏風の上方がまるくぼかされているが、画面上端まで同じ調子で描かれるよりも、屏風に囲まれた空間を意識させる。ぼかしは、丘陵や川など、背景の自然物の表現にも巧みに用いられている。

対角線を使って画面が整理された結果、画面には何も描かれない余白が大きな部分を占めることとなった。また、余白でなくても、背景には淡くぼかした色彩が用いられる。そのため、鑑賞者の視線は、鮮やかな色彩を用いて丹念に描写された人物の方に集中することとなる。さらに、その描かれた人物たちの視線も、鑑賞者に三次元の空間を意識させるのに重要な役割を果たしている。例えば、一月の図の場合、まず衣装文様が細かく描写された三人の人物に目が行く。そして次に三人の視線の先にある屏風、その向こうの筵道へと目が行く。他の図においても、鑑賞者の目はまず登場人物を見、登場人物の視線に誘導されて、その先にある空間を見る。その空間には調度類が置かれていたり、川が流れていたり、ただの余白だったりするが、対角線を利用した遠近の表現と相まって、鑑賞者は小さな画面内に三次元の空間の広がりを感じることとなる。

おわりに

為恭の筆になる十二面の色紙についてその画題と表現手法を考察し、和歌の記された十二面の色紙について和歌の釈文と筆者について述べた。為恭の描写には、有職故実の知識の確かさや古より続く公家の年中行事への強い憧れが伺える。しかし、やまと絵の古画の学習により身につけたものを基礎としつつ、整然とした三次元空間を画面内に構成している点は、当時の絵画における空間表現の趨勢の中にあって近代へとつながっていくものと見ることができよう。(14) 本作品は、十二ヶ月の行事を画題とした諸本の中でも特別に完成度が高いと思われる。今後は、こうした作例が求められた為恭を取り巻く当時の環境や、他の為恭作品の中での本作品の位置付けについて、さらに詳しく調べていきたい。

注

（1）画題となった各行事の内容については、『古事類苑』（吉川弘文館）の「天部・歳時部」、「神祇部」二・三、「服飾部」、「楽舞部」一、『日本国語大辞典』（小学館）、嗣永芳照編『図説宮中行事』（同盟通信社　一九八〇年）、鈴木敬三編『有職故実大辞典』（吉川弘文館　一九九六年）を参照した。

『有職故実大辞典』では、「公事」は「公務。ひいては朝廷で行われる公的な行事」、「節会」は「朝廷で、節日その他の重要な公事のある日に、群臣を集めて賜わった公式の宴会。節会は元来正月一日・同七日・同十六日・三月三日・五月五日・七月七日・十一月新嘗会などの節日に行われる集会を意味した。このとき賜宴を伴うことが多かったところから、のちには特に酒饌を賜わることに限って節会と称するに至った」と説明されている。

本作品の画題となった行事のうち初午詣・賑給・初雪見参以外の行事は、勢多章甫が明治二十一年（一八八八）に纏めた『嘉永年中行事』に朝廷の公的な行事として記載される。賑給と初雪見参については、一条兼良が応永三十年（一四二三）頃に著したといわれる『公事根源』（速水房常が注釈を加え、明和元年［一七六四］に跋語を記した『公事根源愚考』を参照した）において、その起源等が考証されている（『嘉永年中行事』『公事根源愚考』は、『改訂増補故実叢書』第二十三巻［明治図書出版　一九九三年］に所収）。初午詣については、朝廷の公式行事として行われたことを記す文献を見つけることができなかった。

（2）『冷泉為恭展　幕末やまと絵夢花火』（岡崎市美術博物館　二〇〇一年）に掲載の「略年譜」を参照した。

（3）付属の罫紙（枠外に小さく「㊄藤本印行」と印刷されている）に記された内容は次の通りである。記した人物の名前はないが、字体は箱書のものと似ており、岡田華郷が記したものかもしれない。

種松（谷森氏）後臣善（ヤマヨ）ト改ム京都ノ人神典國史ニ精シ歿年不詳
景恒（香川氏）景樹ノ子家學ヲ継ク殊ニ書ヲ能クス慶應二年二月歿ス年四十四
友干（トモユキ）（倉谷氏）季鷹ノ門歌人ナリ（歿年欠ク）
春臣（ハルオミ）（能勢氏）通稱角左衛門京都ノ人城戸千楯ノ門歌人ナリ嘉永頃ノ人
蓮茵（レンイン）（拝郷氏）歌僧ナリ冨樫廣蔭ノ門（歿年欠ク）
蓮月（太田垣氏）寛政三年京都三本木ニ生ル明治八年十二月十日歿ス年八十五

享寿（竹内氏）東寺ノ公人景樹門ノ高足ナリ景樹ノ歿後ソノ門人多ク享寿ノ門ニ集レリ慶應元年三月廿八日歿ス年五十四

直躬（水野氏）大平ノ門人ナリ

延之（河本氏）岡山ノ國學者河本公輔ノ男ナリ

景嗣（景川（ママ）氏）木工氏景川（ママ）黄中ノ養子トナル（歿年欠ク）

忠秋（渡氏）近江ノ人景樹門ノ上足ナリ三条実萬公ニ仕ヘテ家人トナル明治十四年六月歿ス年七十一

なお、和歌を記した各人物については、漆山天童編『近世人名辞典（日本書誌学大系三六）』（青裳堂書店）、森銑三編『近世人名録集成』（勉誠社）、『和歌大辞典』（明治書院　一九八六年）、『女流著作解題』第一篇　和歌（女子学習院　一九三九年）、『日本書道辞典』（二玄社　一九八七年）、小笹喜三編著・平春生補稿『平安人物志短冊集成』（思文閣　一九七三年）を参照した。『平安人物志短冊集成』には、景恒、友干、春臣、蓮因、蓮月、延之、景嗣、忠秋の短冊の写真が掲載されており、筆跡を確認することができた。蓮月については『大田垣蓮月展』（思文閣ロイヤル画廊　一九九八年）も参照した。

（4）田中親美編『為恭画集』上　田中槃薄堂　一九一一年

「公事十二ヶ月図」は田中氏の解説によると「絹本着色」「各竪六寸一分横五寸四分」（竪約十八・五センチ、横約十六・四センチ）。制作時期は、署名に記された「式部大録」の官位から、一八五〇年六月三日から一八五五年一月までの間と考えられる。田中氏の解説によると各図の画題は次の通りである。

正月「御杖図」、二月「春日祭勅使図」、三月「石清水臨時祭舞人図」、四月「賀茂祭宣命使図」、五月「賑給図」、六月「大祓図」、七月「乞巧奠図　棚機祭」、八月「駒迎図」、九月「着綿図」、十月「雪山図」、十一月「五節殿上淵酔図」、十二月「内侍所御神楽図」

（5）楢崎宗重「冷泉為恭筆　年中行事図」『国華』七五七号　一九五五年

「年中行事図」は「絹本著色」「竪二一・八糎　横一九・〇糎」ということであり、サンリツ本の色紙と体裁が似ている。制作時期は署名の官位から、サンリツ本と同じ一八五八年一月から一八六二年一月までの間と考えられる。楢崎氏の解説によると、色紙裏の銀箔をおいた紙面には為恭の手蹟で次のように書いてあるとのことである。

「正月　小朝拝三公己下中殿の東庭に参りて拝玉ふところ」「二月　稲荷の社に参てゝしるしの椙折てまかれるところ」「三月　石清水臨時祭舞人のすかた」「四月　加茂祭勅使宣命をよまるゝところ」「五月　賑給とて貧きもの老たるものなとに米布なと玉ふところ」「六月　水無月秡のちの輪進しをたるかた」「七月　たなはたまつりする女のさま」「八月　駒迎のところ」「九月　菊のきをわたに移の香をとりて玩ふところ」「十月　初雪の見参とて御前の壷に蔵人所衆の上臈滝口のともからをして雪山つくらしむるところ」「十一月　新茸祭中和院行幸のところ」「十二月　内侍所臨時御神楽人長舞ところ」

(6)　水尾比呂志「冷泉為恭筆　公事十二ヶ月図」『国華』一〇二九号　一九七九年

水尾氏は、署名と裏面書入から一八五四年の制作とされている。裏面には次のような書き込みがあるとのことである。

「正月　小朝拝」「二月　春日祭」「三月　石清水臨時祭」「四月　鴨祭」「五月　賑給」「六月　大祓」「七月乞巧奠」「八月　駒牽」「九月　九日菊に綿きせて移の香もてはやしたるいにしへの風流なり」「十月　弓場始」「十一月　初雪見参」「十二月　内侍所臨時御神楽　以上十二枚公事之繪去年染筆也　式部少丞為恭」

水尾氏の解説によればこの作品にも岡田華郷が「公事十二ヶ月節會」と箱書を書いているようである。水尾氏は、節会とは天皇が臨席する朝廷の節日の集いを言う語であるから、それ以外の行事も含むこの作の題は、単に公事十二ヶ月図もしくは年中行事図とするのが妥当であろうとされている。

(7)　『桂園一枝拾遺』は、香川景樹が自撰しながら未完に終わったものに、景恒が門人たちの勧めと助けによって追加して成った私家集であるが、序文は渡忠秋により嘉永二年（一八四九）七月八日に記されたものである。『桂園一枝拾遺』本文・解題（『新編国歌大観』第九巻　角川書店　一九九一年）参照。

(8)　白石悌三・山田洋嗣『海人の刈藻』解題（注7前掲『新編国歌大観』第九巻）

(9)　注7前掲『新編国歌大観』第九巻に翻刻されたものによる。

(10)　恒川平一『御歌所の研究』還暦記念出版会　一九三九年

(11)　徳富猪一郎『三条実万公・三条実美公』梨木神社鎮座五十年記念祭奉賛会　一九三五年

(12)　注11前掲書

(13) 坂本武雄編・坂本清和補訂『改訂増補公卿辞典』国書刊行会　一九七七年

(14) 為恭作品の表現における近代性に関しては、中部義隆氏が冷泉為恭筆「養老勅使図」（サンリツ服部美術館蔵）について「背景を淡く、人物を濃麗に彩り、遠景の叢林を極めて小さく描く絵画空間の構成には、既に近代的な感覚が表れている」と述べておられる。（「養老勅使図」作品解説『サンリツ服部美術館所蔵名品聚』財団法人サンリツ服部美術館　一九九五年）

（サンリツ服部美術館主任学芸員）

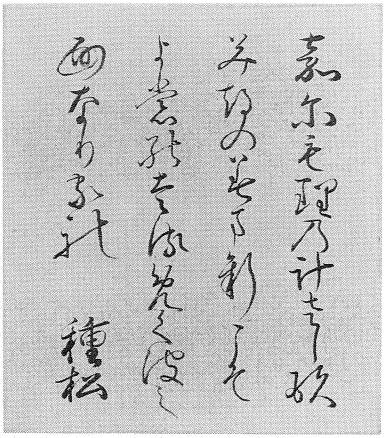

図2　正月(和歌)

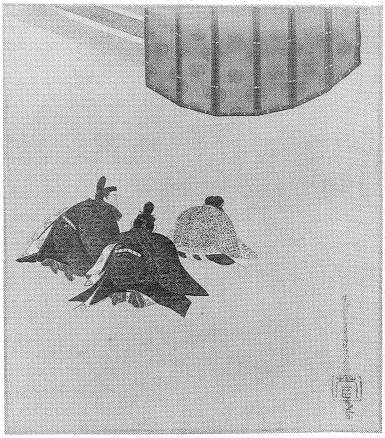

図1　正月

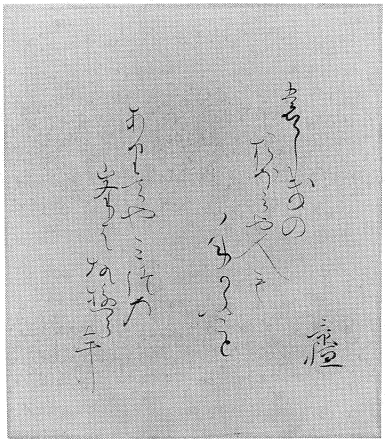

図4　2月(和歌)

図3　2月

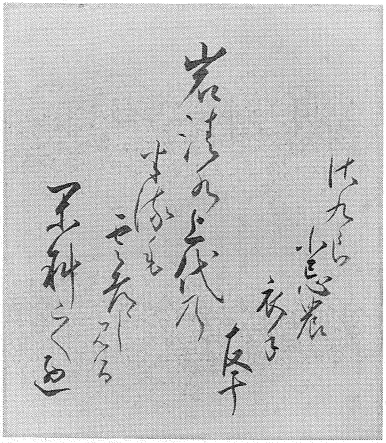

図6　3月(和歌)

図5　3月

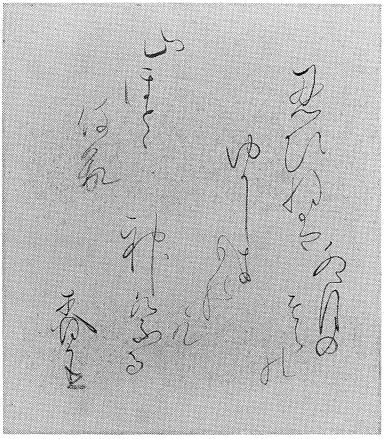

図8　4月(和歌)

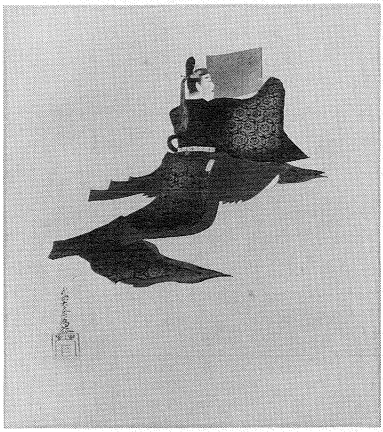

図7　4月

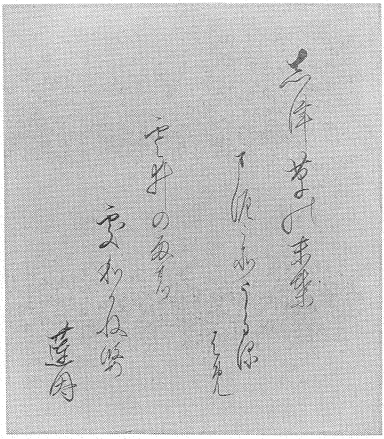

図10　5月(和歌)

図9　5月

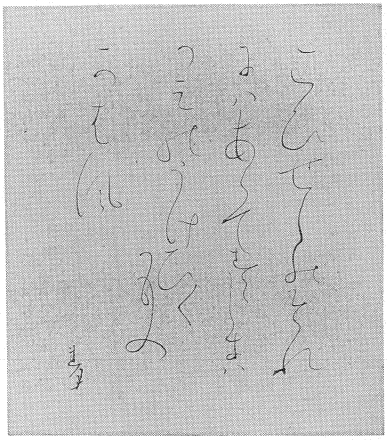

図12　6月(和歌)

図11　6月

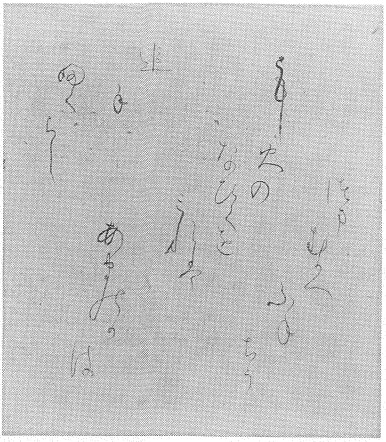

図14　7月(和歌)

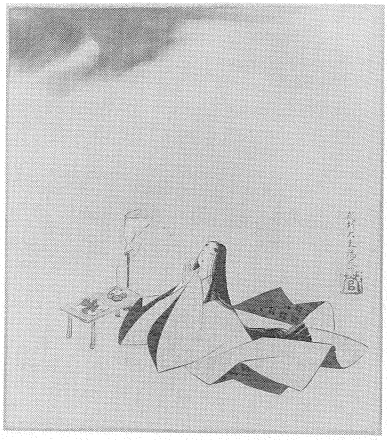

図13　7月

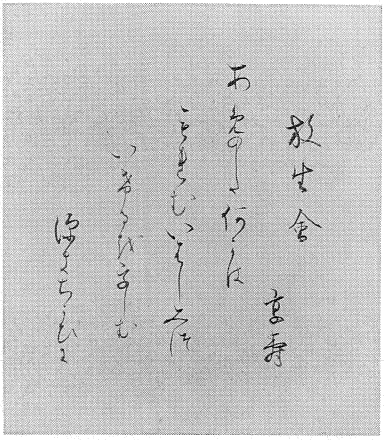

図16　8月(和歌)

図15　8月

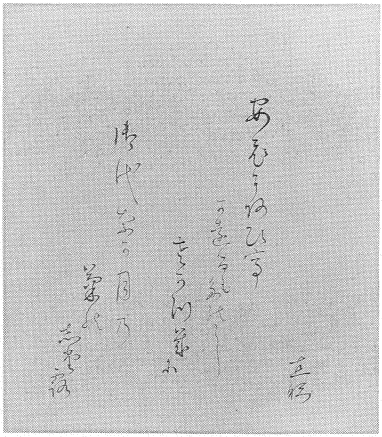

図18　9月(和歌)

図17　9月

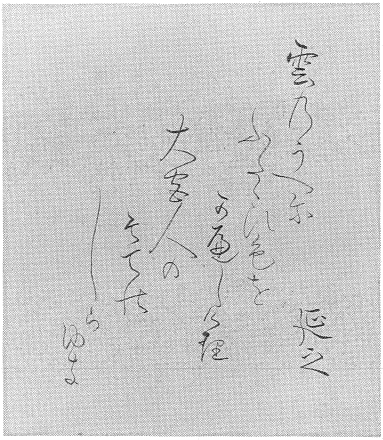

図20　10月(和歌)

図19　10月

図22　11月（和歌）

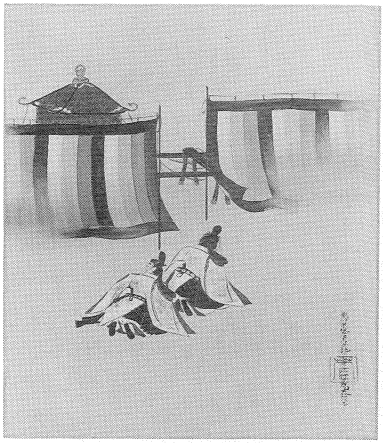

図21　11月

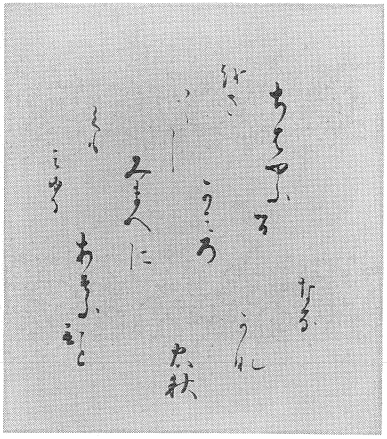

図24　12月（和歌）

図23　12月

SUMMARY

"Annual Functions" by Reizei Tamechika

Chiyoko UNO

This article introduces an album with twenty-four silk *shikishis* on its pages, which is now owned by Sunritz Hattori Museum of Arts. Reizei Tamechika (1823-1864) painted annual functions of court nobles on twelve *shikishis*. Judging from his signatures, he executed the set sometime between 1858 and 1861. The set shows the refined skill of Tamechika and it is notable that he represented a three-dimensional space in each *shikishi*. On twelve other *shikishis,* poets and scholars of *Kokugaku,* sutdy of native culture of Japan, wrote poems about the same functions that Tamechika painted. The set arouses our interest in relationships among persons who were concerned in its execution. Tamechika was in favor with Sanjō Sanetsumu and Sanetomi. Tanimori Tanematsu, who wrote the poem of January, and Watari Tadaaki, who wrote the poem of December, served the Sanjō family.

The scenes depicted are:
January: *Shihōhai* Ceremony, the Emperor's prayers to the star of the year, the four cardinal points and burial mounds of past emperors.
February: Going to worship at Fushimi Inari Shrine. March: Dancer going to dedicate a dance at Iwashimizu Hachimangū's festival. April: Imperial messenger reciting the imperial prayer at Kamo Shrine. May: Ritual of giving rice and salt to poor people in Kyoto to charity. June: Ritual of expiating people's sins. July: Prayers at the Star Festival. August: Ritual of setting fish free in Iwashimizu Hachimangū's festival. September: Drinking *sake* with chrysanthemum flowers in at the Chrysanthemum Festival. October: Courtiers going to Court on the year's first snowfall. November: Emperor's palanquin going to *Shinkaden* Palace at the Harvest Festival. December: *Shinto* dance in the garden of *Naishidokoro,* Sacred Mirror Hall.

キーワード：冷泉為恭　年中行事図　サンリツ服部美術館　渡忠秋
空間構成